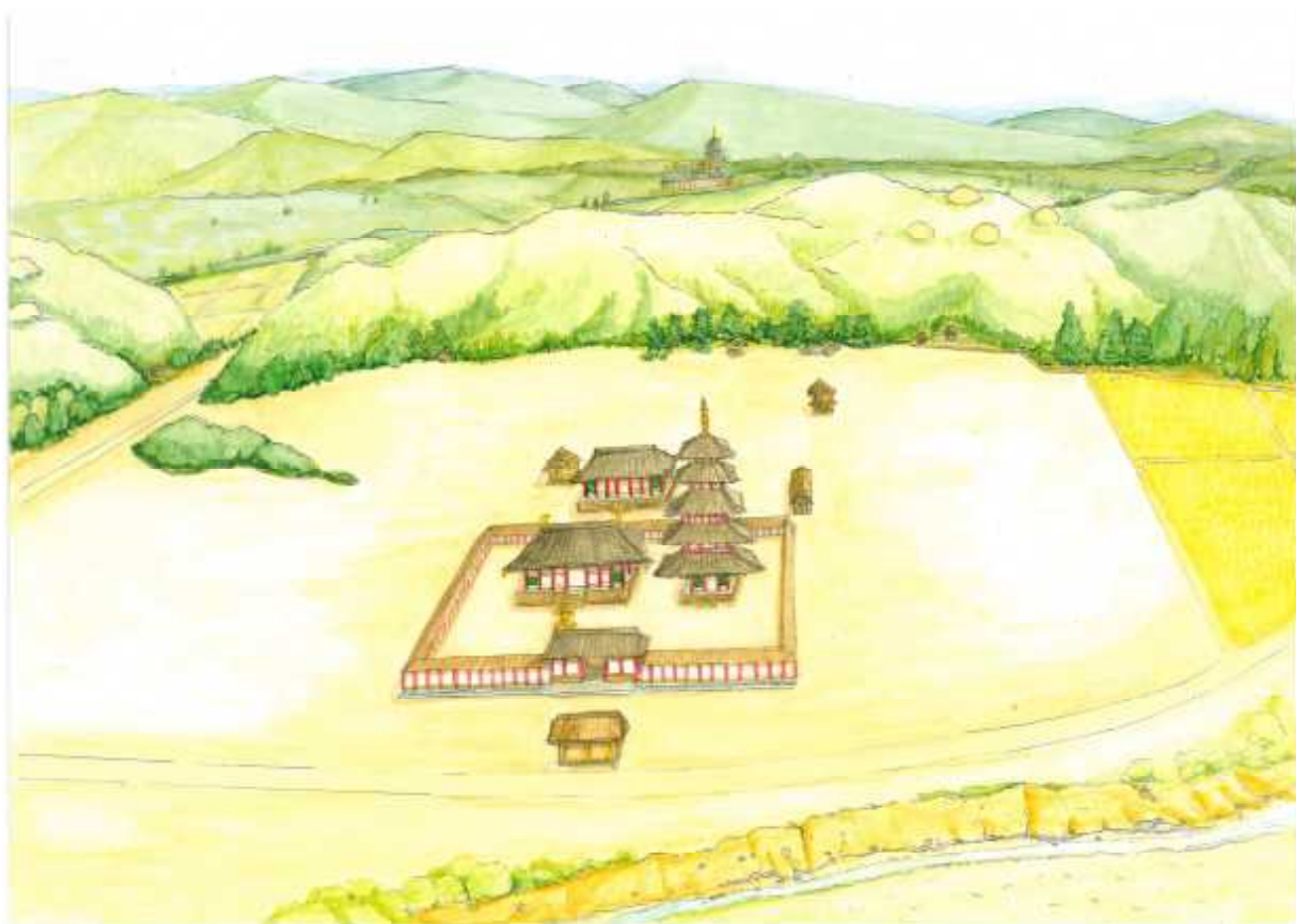


野中廃寺史跡指定記念シンポジウム

「野中廃寺の謎に迫る」



野中廃寺創建期のイメージ図

(作画：門田香織)

日時：令和8年10月3日（土）13：00～16：30

会場：南国市地域交流センターみあーれ ホール

主催：南国市教育委員会

後援：高知県・高知県立埋蔵文化財センター

野中廃寺史跡指定記念シンポジウム

「野中廃寺の謎に迫る」

スケジュール

13:00～ 開会行事

13:10～ 野中廃寺の発掘調査成果 南国市生涯学習課 油利 崇

13:30～ 基調講演1「野中廃寺の指定の意義」
奈良大学教授・元文化庁主任文化財調査官 近江 俊秀

14:30～ 休憩

14:50～ 基調講演2「野中廃寺と古代寺院の世界」
島根大学名誉教授・高知県史編さん考古部会委員 大橋 泰夫

16:00～ 座談会・質疑応答

16:30 閉会

野中廃寺の発掘調査成果

南国市生涯学習課 油利 崇

1. 野中廃寺の位置

- ・南国市の中心部、現在の南国市元町1丁目の長岡西部保育所近くに所在。JR後免駅から西に約500m、南国市役所からは北に約300mの位置。
- ・南西に約500mに若宮ノ東遺跡という古代の役所跡の遺跡があり、野中廃寺と深い関係がある。
- ・野中廃寺から真北に約2kmに土佐国分寺が位置。

2. 伽藍配置と基壇

- ・中門と金堂の基壇は昔から知られており、2020年の発掘調査で塔、講堂基壇跡を発見。
- ・金堂基壇は東西25m以上、南北17m以上と国分寺に匹敵する規模の大規模基壇で、氏寺としては異例の大きさ。（※氏寺：郡司層など地域の有力者である氏族が建てた寺のこと）
- ・西に金堂、東に塔、南に中門、北に講堂を配置する法起寺式伽藍配置。
- ・四国内の古代寺院と比較して現状で最も伽藍配置が判明している例の一つ。
- ・野中廃寺の建物方位は真北から約6.5度東に傾いた方位で設計されており、国分寺に近似。

3. 瓦から見える関係性

○瓦窯跡

土佐山田古窯跡群（香美市土佐山田町新改周辺）、
若宮窯跡（高知市介良）

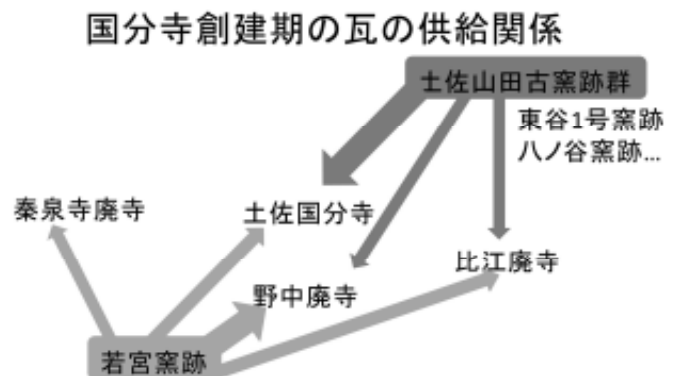
◎野中廃寺の供給元

野中廃寺は約99%の瓦を若宮窯跡から供給し、残りは土佐山田古窯跡群等から

◎土佐国分寺の供給元

国分寺はほとんどを土佐山田古窯跡群から供給し、一部若宮窯跡等から供給

⇒共通する瓦を使用していることから野中廃寺の創建時期は国分寺創建期に近い時期



4. 野中廃寺と土佐国分寺の共通点

- 土佐国分寺の真南約2kmに立地。
- 建物（中軸線）の方位がほぼ同じ
- 大規模な金堂・講堂基壇
- 一部に共通の瓦を使用
- 土佐国分寺と同じ8世紀中頃に創建

おわりに

このように土佐国分寺と同時期に創建した氏寺である野中廃寺は、国分寺と非常に関係が深い寺院であることが判明しました。このことはどういう意味を持つのか、この後の講演で掘り下げていきます。

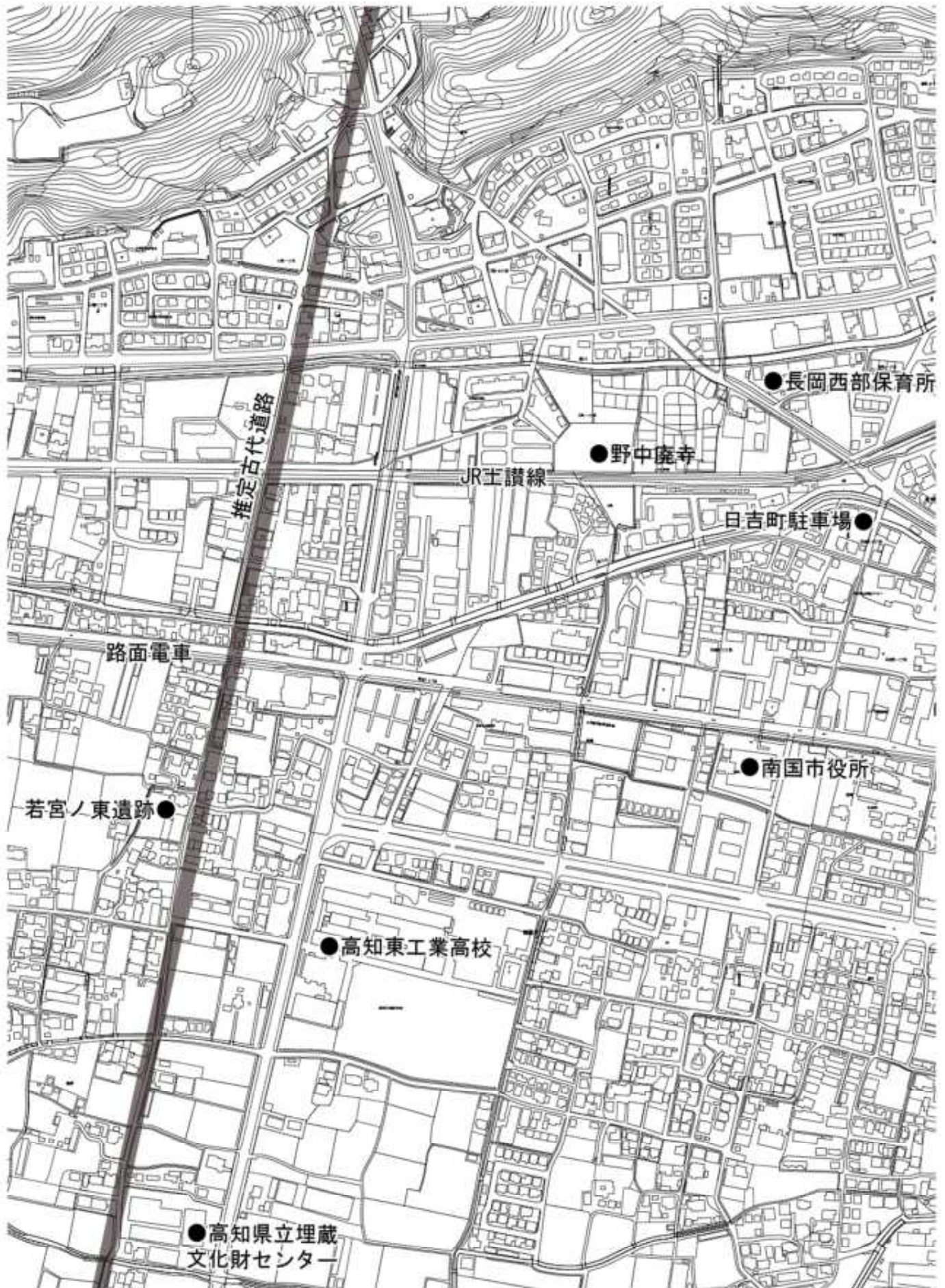


図1 野中廃寺へのアクセスと周辺遺跡

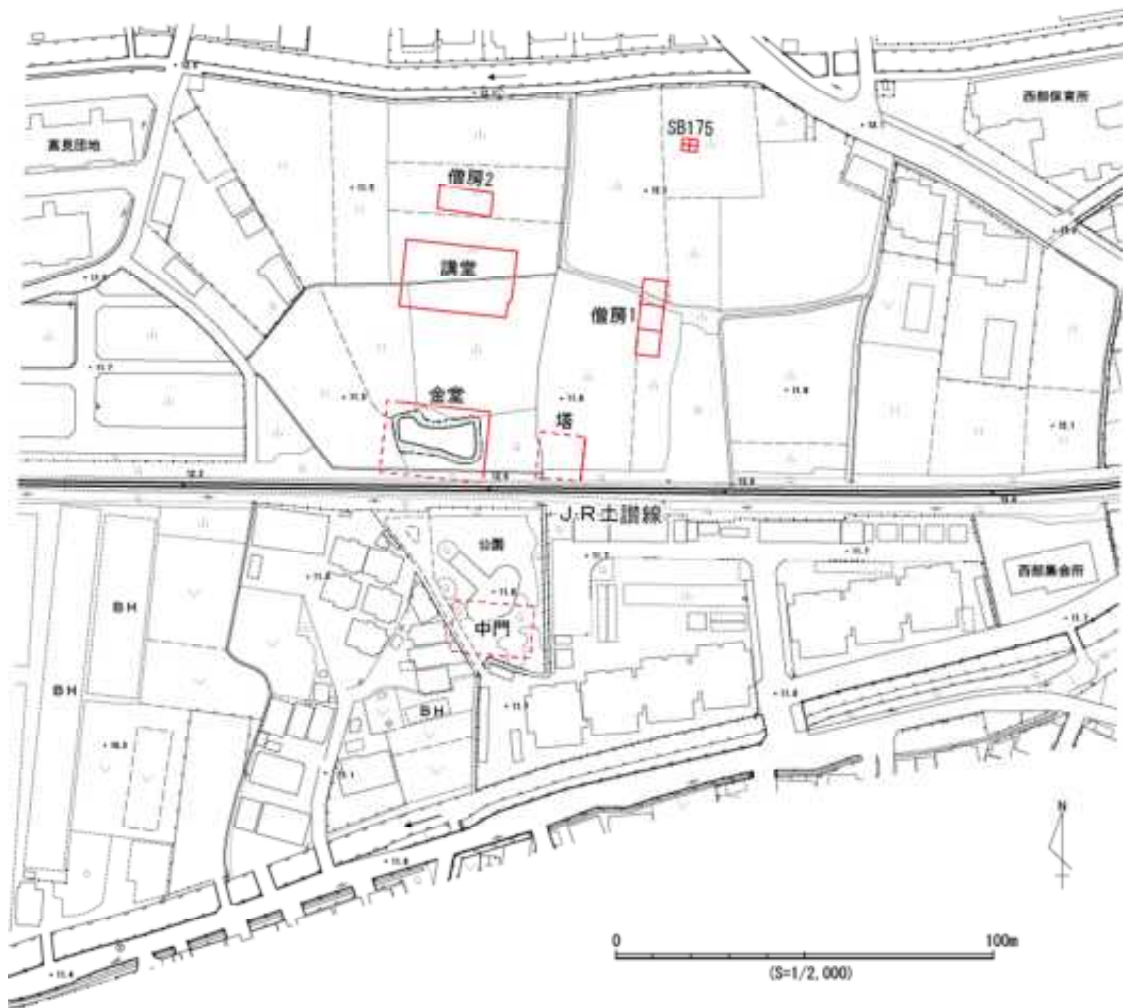


図4 野中廃寺の伽藍配置



図5 野中廃寺金堂基壇と東辺石列・石敷(北東から)

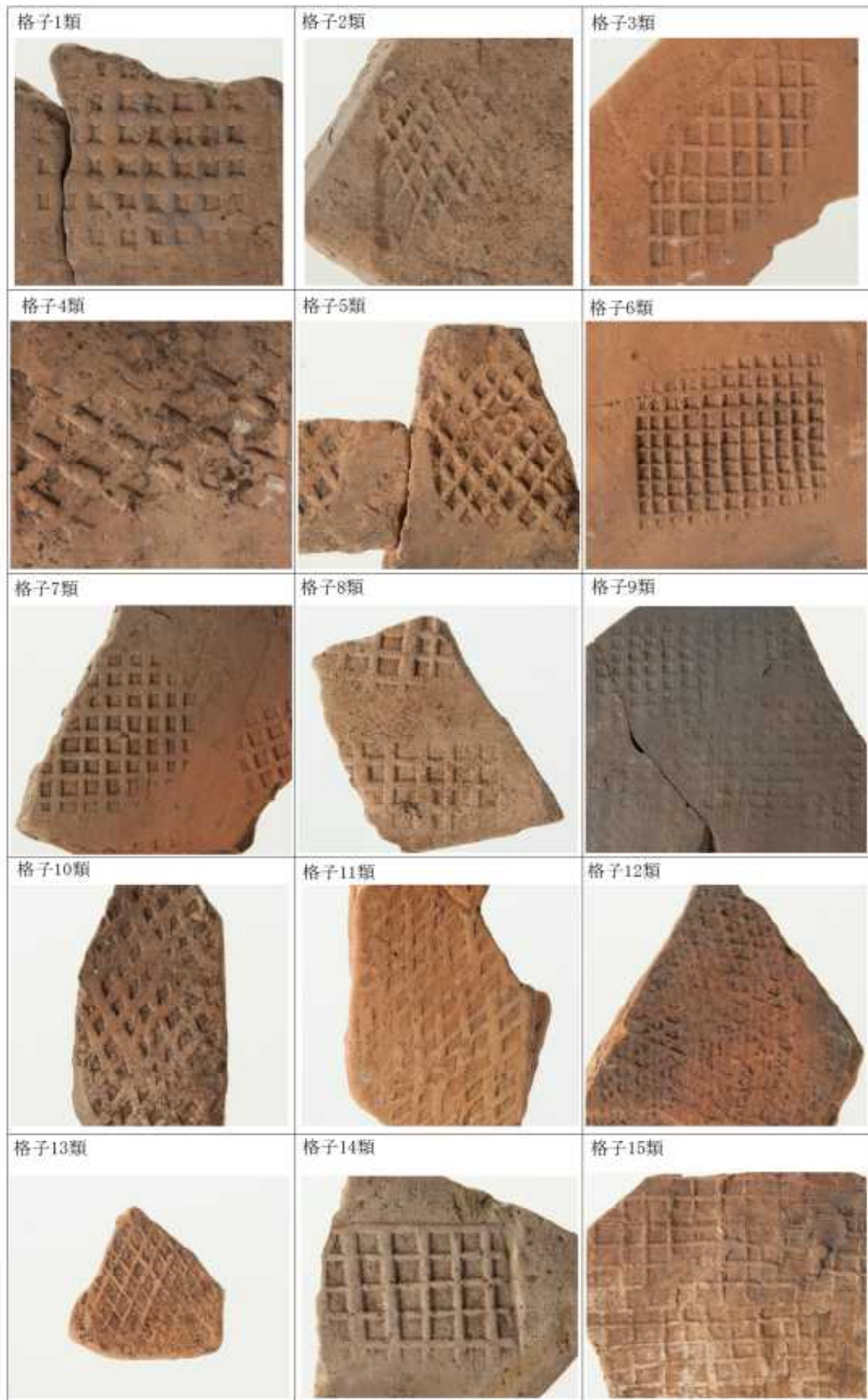


図6 野中廃寺の平瓦格子タタキ分類図(S=1/2)

分類	格子目数	桶巻作り	出土位置	点数	国分寺	比江廃寺	生産地	備考
1類	8×7	○	中門	35	×	×		丹線含む
2類	6×7?	○	中門	1	×	×		
3類	8×9	○	講堂	4	○	○	東谷1号窯跡	
4類	7×6 α	○	講堂	2	○	○	若宮窯跡	
5類	不明	○	講堂	13	○	○		
6類	11×11	○	講堂	4	○	×	土佐山田古窯跡群 ^カ	
7類	10×10	○	講堂	12	○	×		
8類	8 α ×9 α	○	講堂	25	○	×	東谷1号窯跡	
9類	6 α ×4 α	○	講堂	6	○	×		全面タタキ
10類	不明	不明	講堂	1	○	×		全面タタキ
11類	不明	○	講堂	7	○	×		全面タタキ
12類	不明	○	講堂	2	△	×		全面タタキ
13類	5 α ×8 α	不明	講堂	4	△	×		
14類	6 α ×5 α	不明	講堂	1	×	○		
15類	不明	不明	講堂	6	×	×		全面タタキ

図7 野中廃寺の平瓦格子タタキ分類一覧表



図8 同じ叩き板の痕跡(格子4類)がある野中廃寺・土佐国分寺・比江廃寺・若宮窯跡出土平瓦

参考文献

- 高知県文教協会 1959『南路志 閩國之部 上巻』
 高知県教育委員会 1963「野中廃寺跡緊急調査報告」『野中廃寺跡緊急調査、広瀬遺跡、船戸遺跡』高知県文化財調査報告書 第13集
 南国市教委 2024『野中廃寺』
 南国市教委 2025『野中廃寺2』
 八雲立つ風土記の丘資料館 1999『古代の技術を考えるー大量生産への工夫と技術ー』
 山本哲也 1991「野中廃寺跡」『高知県埋蔵文化財センター年報1』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
 山本哲也 1992「7. 南国市野中廃寺跡」『埋文こうち』第5号 高知県教育委員会文化振興課
 油利崇 2026「土佐山田古窯跡群における古代瓦供給関係の検討」『高知考古学研究』第10号
 油利崇 2026「野中廃寺と長岡郡の古代寺院」『土佐史談』第292号

野中廃寺指定の意義

—「重要な遺跡」はどのように史跡になるのか—

奈良大学文学部

近江 俊秀

1 野中廃寺が「史跡になった」ということ

令和8年2月、南国市の野中廃寺跡が国の史跡に指定された。野中廃寺は、南国市の中心部に近い場所に所在する奈良時代の寺院跡である。現在の市街地の中にあり、周辺では住宅地や道路などの整備が進んでいる。そうした現代的な景観の地下に、奈良時代の大規模な寺院跡が残されていた。「国の史跡に指定された」と聞くと、「それだけ重要な遺跡なのだから当然なのだろう」と思われるかもしれない。

しかし、史跡指定は決して自動的に行われるものではない。古い遺跡であることだけでも、地域にとって大切であることだけでも、史跡になるわけではない。まず、その遺跡がどのような時代の、どのような性格の遺跡なのかを明らかにしなければならない。そして、その遺跡から日本の歴史について何が分かるのかを考え、同じ時代・同じ種類の遺跡と比較しながら、その価値を説明する必要がある。さらに、価値が明らかになればそれで終わりではない。どの範囲を保存するのか、土地所有者をはじめ地域の人々の理解をどのように得るのか、将来にわたってどのように守るのかといった問題もある。

つまり、史跡指定とは、単に「価値の高い遺跡を国が認定する制度」なのではなく、調査によって価値を発見し、研究によってその意味を説明し、地域と行政が将来へ残すことを選択する一連の過程なのである。その意味で、今回の野中廃寺の指定は、非常に興味深い事例である。

野中廃寺は最初から価値が明確に理解されていた遺跡ではなかった。それどころか、長い間、「謎の古代寺院」であった。そして、史跡として評価するためにも、決して平坦な道を歩んだわけではない。今日の講演では、その過程を振り返りながら、野中廃寺が史跡になったことの意味について考えてみたい。

2 そもそも「史跡」とは何だろう

日本には無数の遺跡が存在する。集落跡、古墳、城跡、寺院跡、役所跡、窯跡、道路跡など、考古学の対象となる遺跡は全国各地にある。しかし、それらすべてが「史跡」なのではない。文化財保護法という史跡とは、遺跡の中でも、我が国の歴史を理解するうえで重要なものとして文部科学大臣が指定したものである。

ここで大切なのは、「古いから史跡になる」ということではない点である。また、「大きいから」「立派だから」「有名だから」史跡になるわけでもない。史跡に指定するためには、その遺跡が日本の歴史を考えるうえでどのような意味を持つのかを、具体的に説明できなければならない。

例えば古代寺院であれば、いつ造られたのか。誰が造ったのか。どのような伽藍を持っていたのか。その地域の政治や社会とどのような関係にあったのか。他地域の寺院と比較したときに、どのような特徴があるのか。そうしたことを明らかにして初めて、遺跡の歴史的な価値を論じることができる。したがって、史跡制度と学術研究とは、もともと切り離すことのできない関係にある。

3 史跡指定制度は、研究とともに育ってきた

このことは、史跡制度の歴史を振り返るとよく分かる。日本で遺跡や名勝、天然記念物を国の制度によって本格的に保存する仕組みが整えられたのは、大正8(1919)年の史蹟名勝天然記念物保存法である。もちろん、それ以前にも陵墓や古墳、社寺、古文書、宝物などを守ろうとする取組は存在した。しかし、全国の遺跡を調査し、その価値を評価して指定し、保存する制度としては、この法律が直接の出発点となった。

ところが、制度ができたからといって、何を史跡にするかが最初から決まっていたわけではない。当時重要だと考えられた歴史と、現在重要だと考えられている歴史とは同じではない。史跡制度の初期には、古墳や城跡、著名な人物や事件に係る場所など、歴史上よく知られた遺跡が重視された。その後、考古学や歴史学の研究が進むにつれて、集落跡、生産遺跡、官衙、交通遺跡など、それまで必ずしも強く注目されていなかった遺跡についても、その歴史的な意味が明らかになってきた。つまり、史跡指定の対象そのものが、学術研究の発展によって広がってきたのである。

昭和 25 (1950) 年に文化財保護法が制定され、現在の史跡制度へと引き継がれてからも、この関係は変わっていない。新しい発掘成果が現れ、新しい研究方法が導入され、歴史の見方が変わる。その結果、それまで価値が十分に認識されていなかった遺跡が、新しい意味を持つようになる。史跡制度は、完成した価値基準に従って遺跡を機械的に選ぶ制度ではない。研究の進展によって新しい価値が発見され、それを制度が受け止めていく仕組みでもある。

この点を理解すると、今回の野中廃寺の指定が持つ意味も見えてくる。

4 「謎の古代寺院」だった野中廃寺

野中廃寺そのものは、最近になって突然発見された遺跡ではない。文化 10 (1813) 年に編纂された『南路志』には、すでにこの場所について古瓦や礎石の存在が記されている。つまり、江戸時代には寺院跡らしい場所として知られていた。発掘調査が最初に行われたのは昭和 38 (1963) 年である。当時、地表に高まりが残っていた中門や金堂の基壇付近が調査され、多数の瓦が出土した。しかし、寺院の年代を決める資料が十分でなく、平安時代の寺院と考えられた。

その後も長い間、創建時期や伽藍配置は明らかにならず、「謎の古代寺院」として扱われてきた。

野中廃寺の評価が大きく変わったのは、近年の発掘調査によってである。興味深いのは、その調査の一部が開発事業に伴って行われたことである。都市化が進む中で開発計画が持ち上がり、その際の発掘調査によって地下の遺構が確認された。つまり、開発と文化財保護との調整の中から、新しい歴史的事実が明らかになっていったのである。

野中廃寺の調査資料を見ると、トレンチ調査によって遺跡の内容と保存状態を確認し、地下遺構は保存されたものの、その場所では開発そのものは進められた。一方、開発計画が及んでいなかった伽藍中心部については、寺院の実態を明らかにするための学術的な発掘調査が行われた。

ここには、埋蔵文化財の調査が持つ二つの役割がよく表れている。

一つは、開発に際して失われる遺跡を記録すること。

もう一つは、その成果を学術的に検討し、歴史を明らかにすることである。

発掘しただけでは歴史は分からない。掘って得られた遺構や遺物を整理し、他の遺跡と比較し、それが何を意味しているのかを考える研究が必要なのである。

5 2020 年の調査が変えた野中廃寺像

野中廃寺について大きな転換点となったのが、令和 2 (2020) 年の調査である。寺域北部を広範囲に調査した結果、それまで知られていなかった塔と講堂の基壇が確認された。その結果、野中廃寺が、西に金堂、東に塔、南に中門、北に講堂を置く、いわゆる法起寺式の伽藍配置を持つことが初めて明らかになった。しかも、土佐では伽藍配置全体が判明した古代寺院はそれまで確認されておらず、四国全体を見ても極めて少ない例であった。

規模も注目された。金堂は東西 25.5m 以上、南北 17.2m 以上という大規模なもので、四国で確認されている氏寺クラスの寺院では最大級である。塔の基壇は一辺約 12.2m、講堂も東西 28.3m、南北 17.8m を測る。主要建物には掘込地業など本格的な基礎工事が行われていた。そして、寺院が造られた時期も、奈良時代中頃、8 世紀第 2 四半期頃と判明した。

ここで野中廃寺の姿は大きく変わる。それまでの「時期のよく分からない謎の寺」から、奈良時代中頃に、高度な技術を用いて造営された大規模な寺院、という具体的な姿へ変わったのである。

しかし、この段階でも「高知県内で非常に重要な寺院だ」という評価だけでは、史跡としての説明は十分ではなかった。

6 「高知では重要」と「国の史跡」は同じではない

ここが今回の指定を考える上で、とても重要な点である。地域で極めて重要な遺跡であることと、史跡として評価されることとは、必ずしも同じではない。史跡とする以上、その遺跡が日本全体の歴史を理解するうえでどのような意味を持つのかを説明しなければならない。

野中廃寺についても、指定を検討する当初、難しい問題があった。7世紀代の古代寺院、特に地方豪族の氏寺については、古代の地方支配に関係する官衙などと一体として保存・評価する例が少なくなかった。

一方、野中廃寺は8世紀中頃の創建である。「8世紀の有力者の寺院」というだけであれば、同じような寺院は全国に存在するのではない。高知県内では極めて重要であっても、それだけで日本史上の重要性を説明することができるのか。そうした問題があった。

そこで注目されたのが、近接する若宮ノ東遺跡である。若宮ノ東遺跡では、正殿と脇殿、門、柵列などが整然と配置された7世紀後半の官衙施設が確認されている。正殿は古代建物として県内最大級で、柱筋も美しくそろう、高度な測量技術によって造られたことが分かっている。当初は、野中廃寺と若宮ノ東遺跡を一体の歴史的空間として評価できないかという考え方もあった。しかし、若宮ノ東遺跡は道路建設に伴って発見された遺跡である。中心的な遺構が道路計画地にあり、周辺ではすでに市街化も進んでいた。

価値が高いことと、史跡として現地保存できることとは別問題である。野中廃寺を史跡として保存するためには、結局、野中廃寺そのものについて、全国的な視点から新しい価値を説明する必要がある。

7 土佐国分寺との関係が開いた新しい視点

その新しい評価の鍵となったのが、土佐国分寺との関係である。野中廃寺は土佐国分寺のほぼ真南、約2kmの位置にある。単に近いだけではない。発掘された瓦を見ると、野中廃寺で確認された格子叩きの瓦15種類のうち9種類が土佐国分寺と同じ叩き具によるものであることが分かった。さらに、野中廃寺と土佐国分寺は、創建時期がほぼ一致する。

周辺の古代遺跡の多くが香長平野の条里地割の方位に規制されているのに対して、土佐国分寺と野中廃寺はその方位とは異なる方向を向き、しかも両者の伽藍方位はよく似ている。そして、土佐国分寺は野中廃寺のほぼ真北に位置する。

瓦、年代、伽藍の方向、立地。複数の異なる情報が、二つの寺院の強い関係を示し始めた。

ここで問題は、「野中廃寺という一つの寺院」から、「8世紀中頃の地方社会における寺院造営」という、より大きな歴史的問題へと変わっていった。天平13(741)年、聖武天皇は諸国に国分寺・国分尼寺の造営を命じた。これまでの研究によって、国分寺の造営は単に国の寺を一つ造るだけでなく、その地域における寺院建築、瓦生産、造営技術、仏教信仰などに大きな影響を与えたことが分かっている。地方の有力者、特に郡司層などが営んでいた氏寺にも、その影響が及んだ。

野中廃寺は、まさにその具体的な姿を示す遺跡として評価できることが明らかになったのである。指定理由でも、土佐国分寺と野中廃寺の強い関係、そして「諸国における国分寺の造営が、郡司クラスの氏寺の造営や修理に影響を及ぼした」ことを示す典型例として、その重要性が評価されている。

ここに、野中廃寺が「高知県の重要な寺跡」から、「日本古代史を考えるうえで重要な遺跡」へと評価される大きな転換があった。

8 野中廃寺の指定が切り開いたもの

私は、この点に今回の史跡指定の大きな意義があると考えている。野中廃寺は、全国で最大の寺院だから史跡になったのではない。最古の寺院だからでもない。著名な人物が建立したことが分かっている寺でもない。むしろ、調査と研究によって、8世紀における国分寺造営と地方有力者の寺院造営との関係という、新しい歴史的問題を具体的に示す遺跡であることが明らかになったために、国の史跡となったのである。

これは重要なことである。史跡指定というと、すでに価値が確立している有名な遺跡を保存する制度のように思われがちである。しかし、野中廃寺はそうではなかった。発掘調査によって事実を積み重ね、瓦を詳しく調べ、伽藍の規模や方向を比較し、国分寺との関係を検討し、さらに全国各地の寺院造営の動向の中に位置づける。そうした地道な研究によって、初めてその価値が見えてきた。

この指定の背後には、南国市による粘り強い調査と、それを支えた研究者・有識者による丹念な研究がある。その意味で、野中廃寺の指定は、単に一つの寺院を史跡にしたというだけではない。8世紀の地方寺院をどのような視点から評価するのかについて、新しい地平を切り開いた調査研究であったと私は考えている。

それは、史跡制度そのものの歴史とも重なる。史跡指定の対象は、学術研究の進展によって広がってきた。野中廃寺もまた、新しい研究によって新しい価値が発見され、その価値が史跡制度によって認められた遺跡なのである。

9 開発調査は「失われる遺跡の記録」だけではない

もう一つ、野中廃寺の指定から考えておきたいことがある。それは、開発に伴う発掘調査の意味である。道路や住宅、公共施設などの建設に際して発掘調査が行われると、「工事で壊される遺跡を記録するための調査」と理解されることが多い。確かに、それは重要な役割である。しかし、それだけではない。

- 開発調査によって、それまで知られていなかった遺跡が発見される。
- 遺跡の範囲が分かる。
- 年代が明らかになる。
- 新しい歴史的事実が見えてくる。

そして、その成果が積み重なることで、従来の歴史像そのものが変わることがある。野中廃寺はその好例である。開発が迫ったことによって調査の機会が生まれ、その調査によって遺跡の内容が明らかになった。そして、開発区域外に残る伽藍中心部については、さらに実態解明のための調査が進められた。結果として、保存すべき価値そのものが明確になった。

開発と文化財保護は、しばしば対立するものとして語られる。しかし文化財行政に本来求められているのは、「開発か保存か」を最初から二者択一にすることではない。

まず調べる。価値を明らかにする。その上で、何をどのように保存すべきかを考える。野中廃寺の歩みは、そのこともよく示している。

10 高知の古代史が、いま変わりつつある

野中廃寺の価値を考えると、もう少し視野を広げて、近年の高知県における発掘調査成果にも目を向けたい。かつて、高知県の古代史は、畿内や北部九州、瀬戸内地域などと比較すると、全国的には必ずしも大きく注目されてきた地域とはいえなかった。

しかし、近年の発掘成果は、その認識を変えつつある。若宮ノ東遺跡では、先ほど述べたように、7世紀後半の整然と配置された官衙施設が確認された。東西方向の正殿、その脇に南北方向の脇殿、南側の門、柵列、溝という明確な配置を持つ。「古代の土佐には本格的な官衙があった」という、文字にすれば当たり前にも見える事実を、実際の建物跡が示したのである。同じ若宮ノ東遺跡では、弥生時代の

刻書土器も大きな注目を集めた。

また、安芸市の瓜尻遺跡では、官衙形成の過程を考える上で重要な遺構や、井戸を中心とした祭祀の空間などが確認されている。

こうした発見を一つ一つ別々の「珍しい遺跡」として見るのではなく、相互に関連づけて考える必要がある。

弥生時代から古代へ→地域社会がどのように形成されたのか→中央の政治制度がどのように受け入れられたのか→交通や生産、宗教はどのように変化したのか

そうした問題を、高知の遺跡から考えることができる時代になってきた。野中廃寺も、その大きな流れの中に位置づけることができる。

11 地方の研究が、日本史を変える

ここで強調したいことがある。地方の遺跡を研究する目的は、その地域の歴史だけを明らかにすることではない。地域で得られた具体的な事実から、日本全体の歴史を考えることができる。むしろ、全国史というものは、地方の具体的な研究を積み重ねることによって初めて成り立つ。

例えば「国分寺の造営によって地方社会の仏教活動が活発化した」と教科書に一行書くことは簡単である。

○しかし、それが実際にはどのような現象だったのか。

○どのような地方有力者が、どの程度の規模の寺院を建てたのか。

○誰が瓦を作ったのか。

○国分寺の技術や人材はどのように地域へ広がったのか。

○地方社会の人々は中央の仏教政策をどのように受け止めたのか。

こうしたことは、各地域の発掘調査を行わなければ分からない。

野中廃寺の瓦と土佐国分寺の瓦を比較する→建物の方向を見る→立地を見る→全国の同時期の寺院と比べる

その積み重ねによって、「国分寺造営と地方寺院」という全国的な問題について新しい具体像が見えてくる。高知の歴史を研究することが、日本の古代史を研究することにつながる。

これこそが、野中廃寺の史跡指定が私たちに教えてくれる、もう一つの大切な意味なのではないだろうか。

12 史跡指定はゴールではない

そして最後に、指定後のことを考えたい。史跡になることは大きな成果である。しかし、指定された瞬間に文化財保護が完成するわけではない。むしろ、その後の方が長い。

これから先、野中廃寺をどのように保存し、どのように見せ、どのように利用するのかを考えていかなければならない。

○史跡公園として整備するのか。

○建物をどこまで表現するのか。

○出土品をどう展示するのか。

○学校教育でどのように利用するのか。

○土佐国分寺や若宮ノ東遺跡など、周辺の遺跡とどう結びつけるのか。

答えは一つではない。そして、行政や研究者だけで決める問題でもない。

史跡を将来へ継承するためには、地域の皆さんに「これは自分たちの町にある大切な場所なのだ」と感じてもらう必要がある。全国的にどれだけ有名な遺跡になっても、毎日その横を通っている人が「何の遺跡か知らない」という状態では、史跡の価値は十分に社会の中で生かされているとはいえない。

文化財は、専門家が価値を認めただけでは生き続けない。多くの人を知り、関心を持ち、それぞれの

立場から関わることによって、初めて次の世代へ受け継がれていく。

今回のシンポジウムでも、野中廃寺の価値を確認するだけでなく、「野中廃寺をどう活かすか」「他の古代寺院・遺跡とどう連携するか」を座談会のテーマとすることが予定されている。

史跡指定は、終点ではない。その遺跡を地域がどう受け継いでいくのかを考える、新しい出発点である。

13 おわりに―野中廃寺から始まる新しい古代史

野中廃寺は、長い間、「謎の古代寺院」であった。

開発に伴う発掘調査を含む地道な調査によって、少しずつその姿が見えてきた。塔が見つかり、講堂が見つかり、伽藍配置が明らかになった。寺院の年代が奈良時代中頃と分かった。土佐国分寺と共通する瓦があることが分かった。伽藍の方向や位置関係を調べることによって、両者の強い関係も見えてきた。

そして、それらを全国の研究成果と比較することによって、国分寺造営が地方有力者による寺院造営に影響を与えた、その典型的な姿を示す遺跡であることが明らかになった。

一つ一つの事実だけを見れば、小さな発見だったかもしれない。しかし、それを積み重ね、結びつけることによって、遺跡の意味は大きく変わった。史跡の価値とは、初めから遺跡の中に「史跡」という札が付いて埋まっているものではない。調査し、比較し、考え、研究することによって発見されるものである。

野中廃寺の史跡指定は、そのことを非常によく示している。そして、これは史跡制度の歴史そのものでもある。

○学問が進むことによって新しい歴史が見えてくる。

○新しい歴史が見えてくることによって、守るべき文化財の範囲も広がる。

その意味で、野中廃寺の指定は、一つの寺院跡を守っただけではない。8世紀の地方寺院をどのように評価するかについて新しい視点を示し、史跡指定そのものにも新しい地平を開いた事例と評価できるだろう。そして今、高知県では、若宮ノ東遺跡、瓜尻遺跡、野中廃寺など、古代史を考えるうえで重要な発見が相次いでいる。これまで十分に知られてこなかった土佐の古代社会が、発掘調査によって少しずつ姿を現し始めている。

高知で行われる研究が、高知の歴史を豊かにするだけでなく、日本古代史そのものに新しい視界を開いていく。野中廃寺が、そのための大きな一歩となることを期待したい。

そして史跡となった野中廃寺が、研究者だけの遺跡ではなく、多くの市民の皆さんに親しまれ、「自分たちの町にはこんな歴史がある」と感じてもらえる場所になっていくことを願っている。

2. 史跡名勝天然記念物

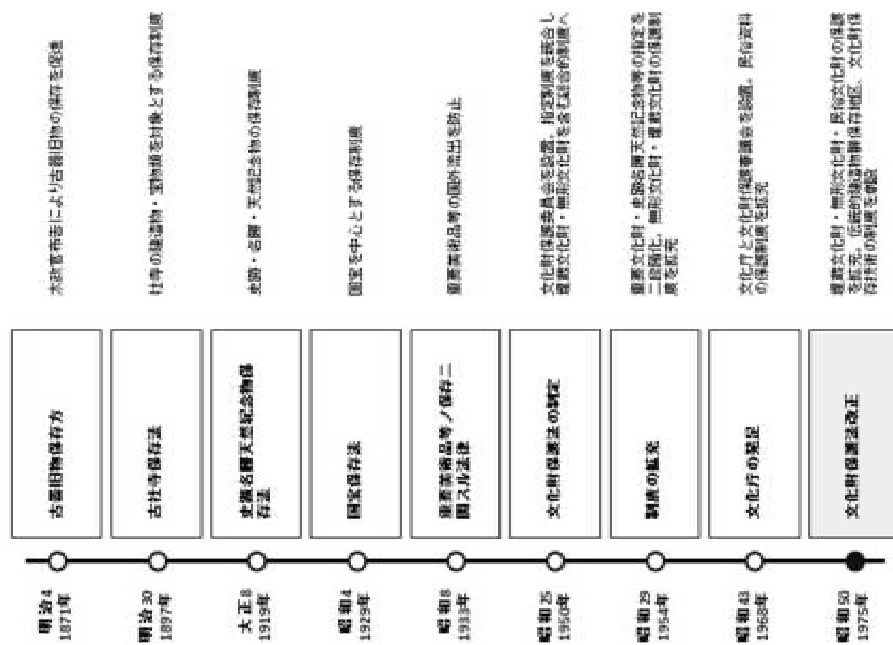
特別史跡	66	史跡	1,923
特別名勝	36	名勝	433
特別天然記念物	75	天然記念物	1,042
計	177 (167)	計	3,398 (3,283)

(注) 史跡名勝天然記念物の件数は、特別史跡名勝天然記念物の件数を含む。

史跡名勝天然記念物には重複指定があり、()内は実指定件数を示す。

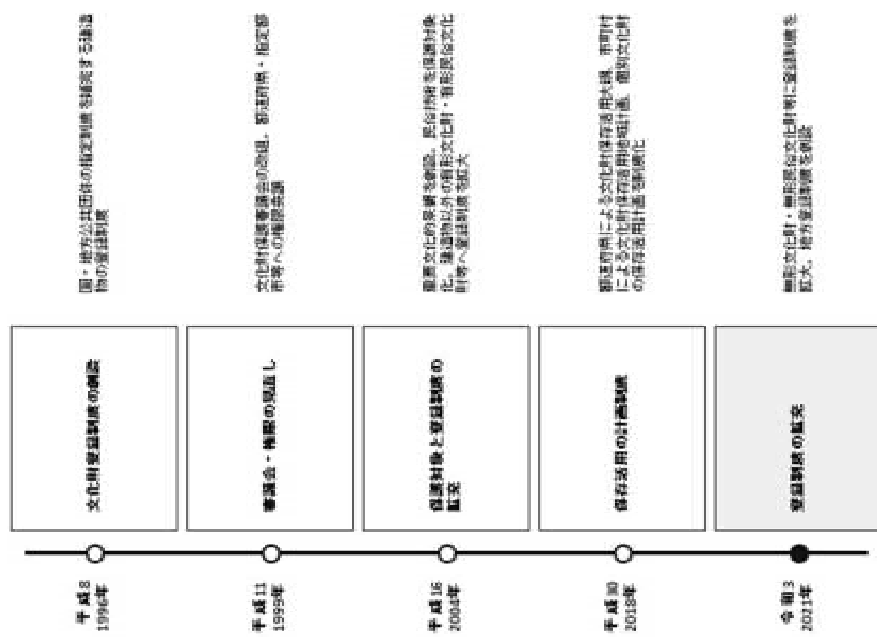
※文化庁ホームページより

文化財保護法の変遷



出典：文化庁「文化財保護法の発展」（2018年）より改定

2



出典：文化庁「文化財保護法の発展」（2020年）より改定

3

時代	原始	古代	中世	近世	近代	計
分類						
貝塚・集落跡・古墳等	711 (17)	16	5			732 (17)
都城跡・国郡庁跡・城跡・官公庁・戦跡・その他政治に関する遺跡	1	112 (10)	211 (1)	114 (9)	10 (1)	449 (21)
社寺跡又は旧境内・その他祭祀信仰に関する遺跡		225 (14)	63	18		306 (14)
学校・研究施設・文化施設・その他教育・学術・文化に関する遺跡		1	1	20 (3)	3	25 (3)
医療施設・福祉施設・生活関連施設・その他社会・生活に関する遺跡			3	4		7
交通施設・通信施設・治山又は治水施設・生産施設・その他経済・生産活動に関する遺跡	14	50	31	102 (2)	27	224 (2)
墳墓・碑		10 (3)	12	62	1	85 (3)
旧宅・園池・その他特に由緒のある地域等		6	19 (2)	58 (4)	2	85 (6)
外国及び外国人に関する遺跡				7	3	10
合計	726 (17)	420 (27)	345 (3)	386 (18)	46 (1)	1,923 (66)

(注) () 内は特別史跡で内数である。

※文化庁ホームページより

野中廃寺と古代寺院の世界

島根大学名誉教授 大橋泰夫

はじめに

野中廃寺は、奈良時代中頃、土佐国分寺創建期に建立された寺院で、金堂・塔・講堂・僧坊などの伽藍全体が判明している。ここでは土佐国の中で、野中廃寺がどのような役割を持っていたかを考える。

1 古代寺院とは

国家や豪族にとって、寺院の建立は権力の誇示、最新の技術の導入を含めて重要なものであった。

・シンボルの変化

豪族の古墳造営は7世紀中頃に終わり、寺院が建立された。権力の象徴としてモニュメントが古墳から寺院に代わる。これまで見たことがない丹塗りの瓦葺の堂塔が建ち、金色に輝く仏像が安置された。

・最新の技術導入

寺院建立は最新の知識、土木・建築技術を持つ総合的な文化が伴うものであった。

・仏教の普遍性と秩序維持

在地の神や祖先信仰は、氏を中心とするものであり、国家にとってより多くの人々に受容された仏教が適していた。国府・郡衙近くに寺院を建立し、仏教の力も利用して国内秩序の安定強化を図った。

2 古代寺院の展開

(1) 仏教伝来と畿内の寺院建立

・538年（欽明天皇13）朝鮮半島の百済国から仏教伝来。588年：飛鳥寺建立開始

・飛鳥時代（～7世紀中ごろ） 畿内に寺院建立、土佐では寺院建立なし

＊仏教の役割：現世利益の追求（病氣平癒など）、祖先の追善供養。丹塗りで瓦葺の寺が、支配者層の権威を示した。

(2) 地方寺院の建立：7世紀後半以降

・天武・持統朝の仏教奨励政策による氏寺の造営 →国家の平安・安寧を祈願

「諸国の家毎に仏舎を作り、仏像と経とを置きて礼拝供養せよ」（『日本書紀』天武天皇14年（685）条）

持統天皇6年（692）に全国に545ヶ寺存在。多くは郡衙（郡役所）周辺に所在。

→土佐国に寺院建立：四国の中でも遅れる。讃岐・阿波国の豪族層からの援助（寺作りの技術者派遣など）で造営。参考：日本最初の飛鳥寺造営（588年）では、百済国から僧とともに寺工（てらたくみ）2名、鑪盤（塔の相輪）博士1名、瓦博士4名、画工1名が渡って建設。瓦は百済のものと酷似。

比江廃寺（南国市）、宝鏡寺跡（香南市）、秦泉寺廃寺、大寺廃寺（高知市）、コゴロク廃寺（奈半利町）、瓜尻遺跡（安芸市）、野田廃寺（土佐市）

・寺院の造営者：郡司層などの豪族（氏族）。野中廃寺を建立した豪族はわかっていない。

(3) 官寺の造営

仏教によって国家を護ろうとする考え方が強まり、同時に国家が寺院・僧侶を統制するようになる。

・7世紀末：藤原京の官大寺（大官大寺、薬師寺、飛鳥寺、川原寺）

・8世紀中（奈良時代中頃）：平城京の東大寺、全国に国分寺建立

＊土佐国分寺：都から派遣された国司が責任者として建立にあたった官寺（国立寺院）で、在地の豪族が建立した氏寺とは異なる。

＊野中麿寺建立の時代背景：仏教の力で国を護ろうとする奈良時代中頃に建立された。奈良時代は、『万葉集』に「青丹よし奈良の都は咲く花の薫うがごとく今盛りなり」と歌われ、天平文化が花開いた。その一方、天候不順で凶作飢饉が頻発、天然痘流行で人心が動揺した。さらに隣国の新羅との緊張関係、長屋王の変など混乱が相次いだ。こうした中で、天平13年（741）、聖武天皇は仏教の功德によって国家を安定させようと国分寺造立の詔を発した。さらに天平15年（743）年に大仏造立の詔を発し、天平勝宝4年（752）に完成し、僧一万人を集めて盛大な開眼供養が行われた。野中麿寺は、土佐国分寺や東大寺大仏殿が建立された頃に建立された。全国的に多くの氏寺は、飛鳥時代後半（7世紀後半）に建立される中で、奈良時代中頃に創建される寺院は数少ない。野中麿寺は、建立した豪族のためだけでなく、土佐国分寺、比江麿寺などとともに国家安寧の役割も果たしていた。

（４）集落内の寺と山林寺院

仏教は平安時代になると一般の人々に広まり、集落内に小さなお堂が建立され、病氣平癒など現世利益を願った。また俗界を離れた山麓で僧侶が修行を行う山林寺院も建立された。室戸市最御崎寺、高知市竹林寺など。

３ 古代寺院の伽藍配置と野中麿寺

四国の中で伽藍全体が判明している重要な寺院の一つ。西に金堂、東に塔を配した法起寺式。ただし講堂は中門の軸線上でない。古代寺院には法起寺式と法隆寺式が多いが、そうした伽藍配置を採用した理由は、わかっていない。

金堂：本尊をまつる仏堂で、僧尼が灯明やお経をあげた。国分寺金堂では釈迦三尊像が安置され、国を護るために金光明最勝王經^{こんこうみょうさいしょうおうきょう}、尼寺では釈迦如来像が置かれ法華經が読まれ、罪を悔い改めて国家の安泰を祈る悔過^{げわ}（法会）が行われた。野中麿寺の本尊は不明。

塔：もとは釈迦の遺骨（仏舎利）を安置し礼拝するための施設で、金堂と並ぶ中心建物でシンボル。『国分寺建立の詔』に「塔は国華」とある。七重塔は高さ50から60mあり、土佐国のシンボルであった。野中麿寺の塔は三重塔か。都からきた人たちが物部川を越えて土佐国府に向かい目にするのは、丹塗りした野中麿寺と土佐国分寺の塔であった。

講堂：日ごろ僧尼が集まって仏法を講説する堂であり、日常的な行事は講堂で行われた。

僧坊：僧の居住施設。僧と見習いが住み、寝起きを共にした。

鐘楼と経楼：二階建ての建物。鐘楼の梵鐘は、僧尼の生活を時報となって律し、その音色によって周辺の人びとを仏教の教えに目覚めさせる効果も期待された。経楼は経を収めた書庫で、仏教を学ぶ者にとって図書館のような役割をはたした。

４ 野中麿寺の瓦からわかること

（１）瓦葺建物と瓦の見方

- ・古代の瓦葺建物：寺院か官衙（役所）だけ。民家は簡素な竪穴住居や掘立柱建物。
- ・屋根景観：野中麿寺と土佐国分寺は軒瓦が少ない。鴟尾・鬼瓦もなく屋根の一部（棟）に軒瓦を使用。
- ・軒瓦：屋根の軒先に葺かれる軒丸瓦と軒平瓦は蓮華文や唐草文などの文様で飾り、その文様が時代を示し、寺院の創建や修理の時期を知ることができる。野中麿寺の軒丸瓦は複弁で外側に珠文を廻らし奈良時代にみられる特徴を持ち、高知市秦泉寺麿寺と同じ木型で製作されている。

・平瓦の作り方：屋根全体を覆う平瓦は、古い時期は桶に粘土板を巻いた後、4分割して作るが、8世紀中頃（奈良時代中頃）から、台の上で一枚ずつ作る一枚作りに変わる。野中廃寺の創建期には両方の瓦が入っており、8世紀中頃を示す。

・軒平瓦の丹線：軒平瓦の顎部には丹塗りの線がついている場合があり、建物に丹を彩色する際に付着した。野中廃寺から丹線がついた瓦が出土し、堂塔は丹塗り建物であった。

（２）土佐国分寺瓦からみた野中廃寺

土佐国分寺は官寺(国立寺院)であり、金堂や塔の瓦は国の費用で製作された。土佐国分寺の瓦は香美市北部山麓の土佐山田古窯跡群、高知市介良の若宮窯跡で作られ、野中廃寺や比江廃寺にも供給された。国分寺瓦が野中廃寺、比江廃寺にも供給されたのは、準官寺（定額寺）として国家と関わりが深い役割も担っていたことを示す。全国的にみると数は少ないが、野中廃寺のように国分寺創建頃に新設された寺院として、埼玉県寺内廃寺、群馬県十三宝塚遺跡^{じゅうさんぼうづかいせき}などがある。これらの寺院にも国分寺瓦が供給され、国の援助で造営が行われていた。

なお定額寺は諸国で平安時代の9世紀後半頃に荒廃していたことが史料で知られており、野中廃寺もこの頃に廃絶していたことが発掘調査によって明らかにされている点も注目できる。

5 野中廃寺と土佐国分寺の共通性

野中廃寺と土佐国分寺には瓦以外にも共通点が多い。まず氏寺の金堂は通常は国分寺より小さいが、野中廃寺の金堂基壇は土佐国分寺と同規模で大きく、建物も大型とみられる。

金堂など伽藍の向きが同じである。高知平野東部の香長条里は12度ほど東に傾き、南海道駅路（古代道路1・2・4）を基準に7世紀後半以降に設けられている。その中で、野中廃寺周辺の地割は香長条里となっているが、建物の方位は条里方位と5度ほど異なり、土佐国分寺と同じ傾きを持つ。なお国分寺東方の比江廃寺は国分寺より創建が半世紀ほど古く、向きも異なる。野中廃寺と土佐国分寺の建設技術は関係が深い。

6 野中廃寺と高知県史編さん事業

高知県では県政150年、令和3年度から新たな高知県史の編さん事業を開始した。日本と世界の歴史の流れの中で高知県の歴史的な変遷をとらえることにしている。

野中廃寺の史跡指定に向けての作業は、県史編さん事業としても行なった。考古部会では、後期旧石器時代から現代までを対象としており、野中廃寺は土佐の古代仏教の展開を知る上で重要な遺跡として土佐国分寺とともに県史で取り上げる。今後、さらに野中廃寺と土佐国分寺について詳しく比較検討を行うことにしている。

＊高知県史の広報：高知県史編さんニュースレター「ときのあかし」、高知県文化広報誌「とさぶし」

おわりに

野中廃寺は氏寺であったが、土佐国分寺とともに国家安寧の役割も担う重要な寺院の一つであった。野中廃寺は、建立した氏のために現世利益を願い、祖先追善供養を行うだけでなく、土佐国府近傍の寺院として、国家のために五穀豊穰を願って法会を行い、地域の中で公的な役割も果たした。

今後、野中廃寺が史跡公園として整備され、市民に活用されていくことを願っている。



図1 南国市周辺の古代道路推定位置と主な古代遺跡位置図

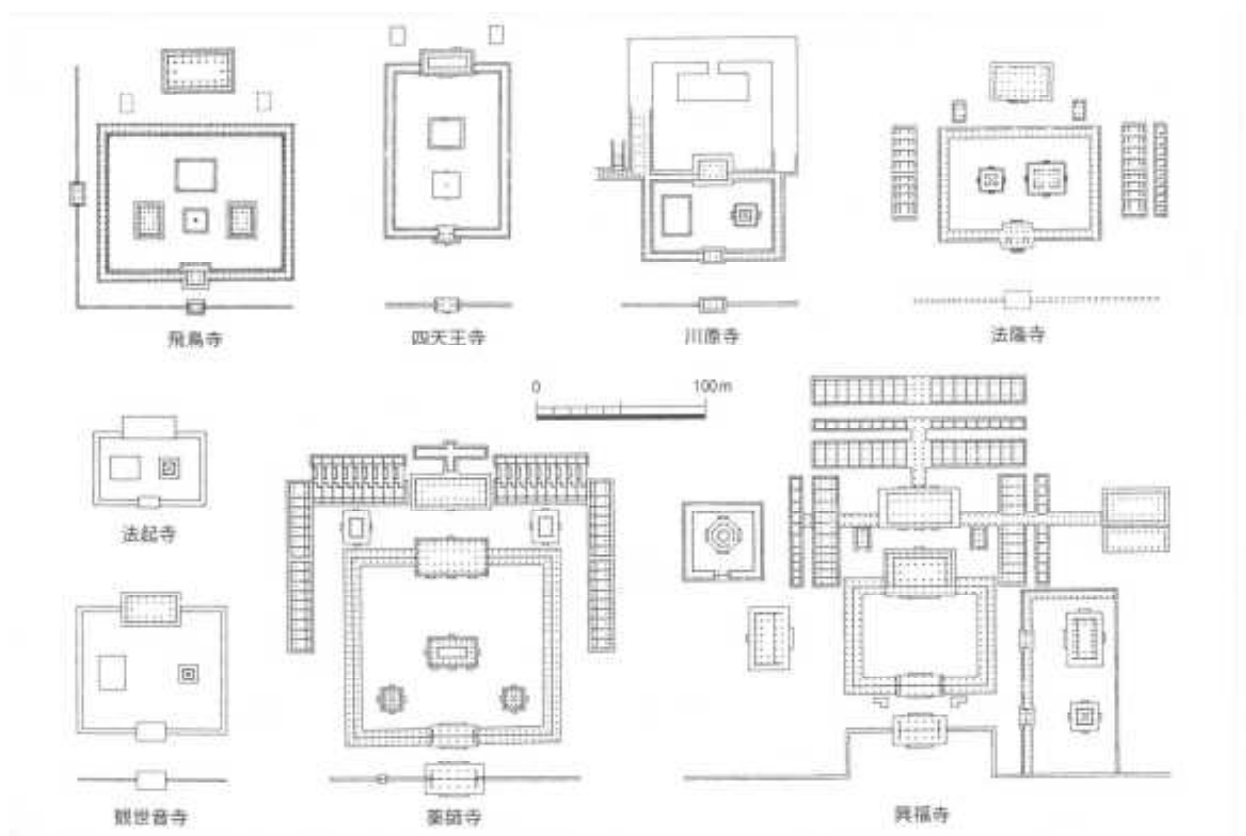


图2 古代寺院伽藍配置図

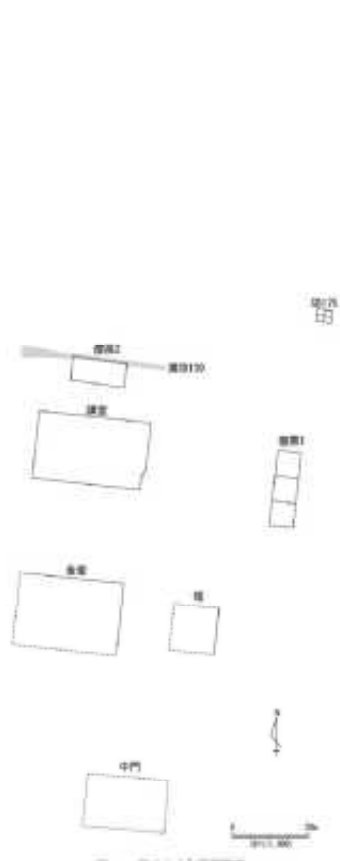


图3 野中廃寺伽藍配置図



图4 土佐国分寺伽藍配置図